

博士論文要旨

学籍番号	氏名
1215001	名和 文香
論文題目	産科医療機関における妊娠期からの継続した看護のあり方に関する研究
<p>目的：本研究の目的は、ハイリスク妊婦を妊娠期から継続して支援するために、産科医療機関が抱える課題を明確にし、課題解決のための看護実践に取り組むことを通して、産科医療機関の助産師が地域で担う役割と看護のあり方について検討することである。</p> <p>方法：本研究は3つの研究から構成される。【研究1】三次医療機関の産科外来における妊婦の看護ニーズと助産師・看護師の妊娠期における支援の現状と課題、一次医療機関における妊娠期の支援の現状と課題、医療機関同士の連携と地域保健との連携における現状と課題を明らかにし、三次医療機関の産科外来における看護支援を考案する資料を得た。【研究2】三次医療機関の産科外来における看護支援方法を考案し看護実践に取り組んだ。その後、考案した看護支援を受けた対象者から評価を得た後、取り組みの評価を行った。【研究3】医療機関同士および地域保健との連携体制における課題を検討するため、助産師・看護師・保健師で事例検討会を行い、その後、事例検討会の評価と連携体制における課題について明らかにした。</p> <p>倫理的配慮：研究対象者には、研究の目的や方法、研究への協力は自由意思であることや個人が特定されないことなど、書面を用いて口頭で説明し同意を得た。本研究は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得て実施した（承認年月：2016年6月、通知番号28-A005D-2）。</p> <p>結果：【研究1】妊婦への聞き取り調査の結果、妊婦はハイリスク妊娠であることを聞いた際、三次医療機関に紹介されることを予想できておらず大きな不安を抱いていた。また、自身の身体に起こっていることを理解することが難しいと感じており助産師も課題として捉えていた。医療機関同士の連携においては、看護の視点から捉えた情報が継続される必要性があると考えていた。【研究2】研究1の結果から、研究コアメンバーで4回の検討会を設け看護支援方法を考案し、10名の妊婦を対象に看護実践に取り組んだ。分娩後の対象者の評価として、「助産師との面談では質問をしたりアドバイスをもらい安心することができた」「自身の身体に起こっていることを理解し妊娠期を通して気を付けることができた」などがあった。考案した看護支援に取り組んだ助産師・看護師は、実践した看護支援の成果として、妊婦の状況に沿った支援を行うことができ、妊婦のセルフケア行動につながったこと、助産師面談の必要性についてスタッフが理解することができたと評価していた。【研究3】看護実践に取り組んだ妊婦の事例検討会を設け、医療機関同士および地域保健との連携における課題について検討し、「看護の視点から捉えた医療機関同士の連携の必要性」や「顔を合わせて話す機会を設けることの重要性」について意見があった。事例検討会の参加者の評価としては、事例検討会などを定期的で開催する必要性や、妊娠期から医療機関同士が連携を図り地域保健につなげていく必要性について述べられていた。</p> <p>考察：ハイリスク妊婦を妊娠期から継続して支援するために、一次・二次医療機関におけるハイリスク妊婦を見逃さず継続してかかわること、三次医療機関におけるハイリスク妊婦への看護の充実を図ること、妊娠期から助産師の役割を知ってもらうこと、妊娠期から育児期を予測し関連機関と連携を図ることが、助産師が担う役割と看護のあり方であると考え。また、看護実践に取り組むにあたり重要と考える組織のあり方は、現場の課題を捉え課題解決のための目的を共有すること、取り組みを進めていくためのリーダーが存在すること、取り組んだ看護支援を評価する機会を持つこと、個々の助産師の意欲を高め三次医療機関において役割を果たす助産師の人材育成を行うことが重要であると考え。</p>	

(別記様式7)

番 号 :
平成31年2月19日

平成30年度博士論文審査結果報告書

主 査 松下 光子
副 査 北山三津子
副 査 服部 律子

平成30年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

記

学籍番号：1215001

氏 名：名和 文香

審査結果：○1. 合格 2. 不合格 3. 保留

[審査結果要旨]

(1,000字以内)

論文題目「産科医療機関における妊娠期からの継続した看護のあり方に関する研究」は、ハイリスク妊婦に対する妊娠期からの継続支援を目指した産科医療機関における助産師の取組みを通じて、助産師が担う役割と看護のあり方を探究した研究である。

第一に、3次医療機関であるA病院に入院中の妊婦、病棟・外来助産師および同医療圏内の1次産科医療機関の助産師に面接調査した。妊婦のニーズは「妊婦健診時にわからないことを助産師に質問したい」「自分の身体に起こっていることを正確に知りたい」であり、産科外来では「助産師が妊婦と関わる時間を設けることができていない」「妊婦が自身の身体に起こっていることを理解できるよう関わる事ができていない」等、医療機関同士と地域保健との連携では「医療機関から地域保健に連絡が取りにくい」等の課題を抽出した。第二に、A病院の産科外来における助産師面談の方法を考案・実施・評価した結果、「産科外来において妊娠期から助産師が妊婦に支援する機会をもつ」「妊婦が自身の身体に起きていることを正しく理解できるように促しセルフケア行動を支援する」等の必要性が明確になった。第三に、A病院の助産師・看護師、1次産科医療機関の助産師および自治体保健師が参加する事例検討会を開催した結果、「顔の見える関係の構築につながる」等の事例検討の意義、「妊娠期から保健師に繋ぐ必要性」「医療機関の助産師同士の情報共有の必要性」等の課題が導出された。以上を通じて、ハイリスク妊婦を継続して支援するには、1・2次医療機関においてハイリスク妊婦を見逃さず継続して関わり、3次医療機関における看護の充実を図ること、妊娠期から助産師の役割を知ってもらうこと、妊娠期から関係機関と連携を図ることの重要性が明確になった。また、看護組織における目的の共有や看護リーダーに求められること等組織のあり方について提言した。

以上の過程は的確にデータ化され論述されており、妊娠期から継続した看護のあり方に関する研究として高く評価できる。審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。当該学生は審査委員会に4回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。